

『あの日見た、  
青空は』

叶  
凧  
生

## 登場人物

日向晴夏（ひなたはるか）（21） 誘拐され、十年間監禁されていた。

橘悠（たちばなはるか）（26） 刑事。無差別殺人で家族を殺されている。

男1

男2

演じる役者は登場人物の実年齢に必ずしも一致しなくてもよい。

時は現代。場所は日本の地方都市。

舞台装置が必要なのは「取調室」「日向の部屋」「橘の部屋」である。「取調室」がメインであり「日向の部屋」「橘の部屋」は簡素なものでよい。部屋をふたつ作らずに、ひとつの部屋を使いまわす手法でもよい。

もちろん、必ずしも装置が必要というわけではなく、素舞台に椅子だけでもよい。

一場……八月の終わり。

二場……一場から一カ月後。

三場……十一月の終わり。

四場……年が明けた二月の初め。

五場……四場から三カ月後。

六場……五場から二カ月と少し。七月。

一場

は雲一つない青空が広がっている。

舞台中央に日向晴夏が立ち、青空を眺めている。

やがて語りですが、その言葉には何の感情も込められてはいない。

晴夏

十年という月日は、何もかも変わってしまったには、十分な時間でした。あの日……

あの夏の日のことは、雲ひとつない、澄み切った青空だったことしか憶えています。今から十年前、当時小学六年生だった私は、小学校からの下校途中に、砂山という男に誘拐されました。後ろからスタンガンで襲われたそうです。誘拐現場にスタンガンが落ちていたので、そうであろうという推測だけであり、その真相はもはや誰にもわかりません。私を誘拐した砂山は、警察が家にやってきたその瞬間、事前に準備してあった毒を飲み自殺しました。警察に保護され私は、あの日から十年の歳月が流れていたことを知りました。私の時間はあの日から止まったままです。

明かりが切り替わると、警察署の取調室。

部屋の中央にはスチール机とふたつのパイプ椅子。

取調室には他に何も無いが、天井近くに小さな窓がひとつついている。

その窓からは夏の日差しと蝉の音が漏れている。

扉を開け、橘悠が入ってくる。

悠の手にはカバンと、コンビニの大きな袋が下げられている。

悠

どうぞ。

悠の声で晴夏も取り調べ室に入ってくる。

部屋に入った方がいいが、晴夏は人形のように立ち尽くしている。

晴夏

……………。

悠

どうぞ。こちらに座って下さい。

悠に促され、ゆっくりと椅子にすわる晴夏。

晴夏が座り終えたのを確認してから悠も椅子に腰を下ろす。

扉から見て奥に晴夏、手前に悠が座っている。

悠は持っていたコンビニの袋をテーブルの上に、カバンは床に置く。

悠

改めて自己紹介いたします。日向さんの事件調書を担当します、橘悠と申します。よろしく願います。保護されてから三日後にお会いして、少しでもお話をさせていた

だいたんですが、覚えていますか？

晴夏

……………。

晴夏は悠と目を合わせずに窓を見ている。

悠 覚えていなくても、大丈夫です、日向さん。今までの生活が一変したんです。私だつて、混乱して何も覚えていないと思います。あれからもうすぐ一カ月……どうですか？少しは落ち着きましたか？

晴夏 ……わからない。

悠 そうですか……そうですね。調書なんです、今日で全部お話を聞こうなんて思っています。ゆつくりと、少しずつ、話せるから話していただければ大丈夫です。お話ししたくないことは、無理に話さなくとも大丈夫です。私も無理強いはいたしません。……。

晴夏は窓を見つめたまま動かない。

やがてふと、何かを思いついたかのように悠の方を見る。

晴夏 ……はるか……？

悠 そうなんです。私もはるかという名前なんです。偶然ですよね。

晴夏はじつと悠を見つめるが、見るというより視線がそこに向いているだけ。

悠 私も日向さんと同じ「はるか」って名前なんです、私は「ゆう」って書いて「はるか」って読むんです。

晴夏 ……ゆう？

悠 悠久の「ゆう」で「はるか」と読むんです。なんでこんな漢字にしたのか両親に聞いたことがあるんですけど、理由は「かっこいいから」って言われてしまいました。私としてはかっこいいより可愛い名前のほうがよかったですけど。中学、高校でもあだ名は「ゆう」。誰も「はるか」って呼んでくれませんでした。きっと「ゆう」があだ名ではなく本名だと思っていた同級生もいたと思います。

晴夏 ……。

悠 日向さんは「晴れた夏」と書いて「はるか」なんですよね。素敵な名前だと思います。

晴夏 漢字は……よくわからない。小学校で習ったのも……ほとんど忘れたから……。

悠 ……すいません。そんなつもりで……ないんです。

晴夏 ……うん。

悠 (無理に明るく) 夏に生まれたからですか？ それともご両親が夏がお好きだったとか？

晴夏 (長い沈黙のあと) わからない。お母さんとは……そんな話、したことない。いつも忙しそうだったから。

悠 そうなんですか……。そうですね。女手ひとつで日向さんを育てていたんですから。

晴夏 私のせいなんだって……。

悠 え？

晴夏 私が生まれたせいで、人生がメチャクチャになったって。

沈黙。

窓の外では蝉が狂ったように鳴いている。

悠 それにしても今日は暑いですよ。この蝉しぐれを聞くと、ああ、夏がきたんだなって思います。暑いし日焼けもするけれど、私は冬より断然夏のほうが好きです。……日向さんはどちらが好きですか？

晴夏 夏は……凍えなくていいから、夏のほうがいい。

悠は椅子から立ち上がり、晴夏に背を向ける。

一点を見つめ動かない晴夏と違い、悠はウロウロと歩き回る。

悠 私ったら、何もこんな殺風景な部屋で話をしなくてもいいことに、今気づきました。こんな、取り調べ室なんかじゃ、日向さんもリラックスして話なんてできませんよね。何も考えずに、いつもの習慣で同じようにしてしまいました。日向さんへの配慮が足りませんでした。ごめんなさい。今日の今ではお部屋の変更ができませんので、次回からはソファアールやテレビがある、もっと明るいお部屋を用意いたします。

ひと仕事終えたかのように、悠は椅子に腰を下ろす。

晴夏 ここでいいです。

悠 え？ でも……。

晴夏 色んなものがある部屋は……まだ苦手。……頭が痛くなる。

悠 ……日向さんがそう言うなら……そうします。

晴夏 ここは……ずっといた、あの部屋に似ているから。

その瞬間、蝉しぐれが鳴りやみ、晴夏の上にスポットがあたる。

晴夏はゆっくりと天井を見上げる。

そこには晴夏にしか見えない青空が広がっている。

永遠に掴むことができない青空に、ゆっくりと手を伸ばす。

暴力的なまでに唐突な蝉しぐれ。

明かりも戻る。

悠 用意したお部屋はどうですか？ 足りないもの、欲しいものがあつたら、遠慮せずに

何でも言ってくださいね。

晴夏 ……色んなものがありすぎて……よくわからない。まるで……ウラシマタロウになったみたい。

悠 急がなくていいんです。ゆっくりと、時間をかけて、慣れていけばいいんです。

晴夏 ……うん。

悠 それでは、そろそろ本題に入ります。日向さんを誘拐、監禁していた犯人、砂山が自

殺してしまったので、詳しい経緯を日向さんにお聞きするしかなくなっていました。話したくないこともあると思いますが、できるだけ話をしてください。何度でも言いますが、無理には答えなくていいです。

晴夏 ……うん。

悠 日向さん、私、刑事ですけど、実は臨床心理士の資格も持ってるんです。警察学校に入る前は大学で心理学を学んでいたから。だからと言っては何ですが、安心して話してください。

晴夏 りんしょう……？

悠 私は心のお医者さんの資格も持っているってことです。厳密には少し違いますけど。

晴夏 私、どこも悪くない……です。

悠 ……そう……かもしれない。

晴夏 ここに来る前にも病院でいっぱい、いろんなことをされた……嫌なことをいっぱいされた……。もう、病院はいや。

悠 病院は私も大っ嫌いです。大丈夫、病院にはもう行きません。私を信じてください。

晴夏 うん。

悠 そういえば、お腹は空いていないですか？ いろいろ買ってきたんです。遠慮なく食べて下さい。

悠は机の上にコンビニのビニール袋に入っていたお菓子を全部出す。  
色とりどりのお菓子のパッケージを見つめているけれど、無表情な晴夏。

悠 どうぞ。遠慮しなくてもいいですよ。全部、日向さんが食べていいんです。

晴夏 ……わからない。

悠 え？ わからないって、何がですか？

晴夏 好きなお菓子がなにだったか、おぼえてない。思い出せない。ずっと考えてるんだけど。

悠 ……いろいろ食べていけば、そのうち思い出すと思いますよ。

晴夏 じゃあ、これ。

なぜかカップラーメンがひとつあり、晴夏はそれを手に取る。

悠 あっ、あっ、それ、私が後で食べようと思って買ったやつなんです。よけておくの忘れてました。すいません。

晴夏、手に取ったカップラーメンを黙って机に戻す。

悠 大丈夫。食べて大丈夫です。そういえば、お箸が入っていないですね。お湯もないですし……給湯室からで沸かすしかないですね。

悠はお菓子の山の中から、割り箸を探している。

晴夏 箸は……まだ苦手。上手にできない。

悠 え？

晴夏 箸は特別な日のものだから……。

悠は割り箸を探す手を止めて、晴夏を見つめる。

悠 その……食事はどうされていたんですか？

晴夏 手で食べた。いつも紙のお皿で……毎日同じだった。

悠から顔をそむけ、再び窓のほうを見る晴夏。

悠はお菓子の袋をひとつ手に取る。

悠 ……これ、私のおすすめなんです。食べてみませんか？

晴夏 ……。

悠 あっ、こっちもお勧めです。甘いのとしょっぱいの、どっちが好みですか？

悠は手当たりしだいお菓子の袋をあけるはじめる。

そんな悠を晴夏は無表情に見つめる。

晴夏 美味しいって……まだよくわからない。みんな同じ味のような気がする。

悠 ……そう……なんですね。

悠は開けようとしたお菓子の袋を手を持ったまま固まる。

晴夏 景色だってそう。綺麗な青空だねって言われても、よくわからない。

悠は手に持っているお菓子を机の上に戻す。

晴夏 私、これからどうなるの？

悠 ……それは……大丈夫です。私たちが全力で日向さんの生活をバックアップします。

晴夏 お母さんもいなくなっって、どうやって生きていけばいいのかわからない。私はもう大人の歳だから……。子供じゃないって言われた。

悠 日向さんが社会復帰できるその日まで、私たちがずっと支えますから安心して下さい。ソーシャルワーカーとも毎日のように話し合っています。日向さんが不安な気持ちにはよく理解できます。今の私には、ただ信じて欲しいとしか言えません。

悠は椅子から立ち上がり、晴夏を見つめる。

晴夏 お母さん……もう会えないなんて……思ってたなかったから。

悠 お母様のことは、本当に残念でした。日向さんの唯一のご家族だったのに。あと一月早く日向さんを見つけることが出来ていたなら、お母様の死目には会わせてあげられたのに……私たち警察の力不足です。申し訳ございません。

晴夏 私……ひとりぼっち……なの。  
悠 お母様の代わりにはなれないかもしれませんが、遠慮なく私を頼ってください。力になります。

悠は晴夏に触れようと手を伸ばすが、すぐに伸ばした手を戻す。

晴夏 お話しはしないの？

悠 え？ お話？

晴夏 さつき、ここに来たとき、お話するって言ってたから。

悠 ああ、調書のことですか？ あ、はい、そうですね。

晴夏 しないの？

悠 ……わかりました。では、はじめさせていただきます。

晴夏 ……。

悠、床に置いたカバンからICレコーダーを机の上に取り出し、録音ボタンを押す。次にカバンからノートとペンを取り出し、ノートを開く。

悠 まずは一番最初の所から……。今から十年前、小学校の下校時に、砂山に誘拐されたわけですが、場所は覚えていますか？

ゆつくりと、調書を取り交わす二人。

蝉しぐれが大きくなり、ふたりの会話を掻き消してしまう。

一時間ほど経ったのだろうか、蝉しぐれがゆつくりと止む。

悠 今日は、ここまでにいたしましたし。それで……最後に大切なことをお聞きします。

これは……日向さんにとって、とても辛い記憶だと思えます。……それでもお聞きします。もちろん、答えたくなければ答えなくても大丈夫です。

晴夏 うん。

悠 砂山に、どのくらいの頻度で変なことをされましたか？

晴夏 ……へん？

悠 ……裸にされたり、下半身……ここらへんを触られたりとかです。

悠は立ち上がって下腹部に自らの手を置く。

晴夏 はじめは………すごく痛かった……。

悠 ……。

晴夏 でも、そのうち慣れました。



悠 ……それは……それは、その、いつぐらいから、されていたんですか？ 覚えていますか？

晴夏 わからない。でも、毎日あった。とても嫌な時間だった。でも、我慢しないとご飯がもらえないから……。

悠 ……そうですか。話してくれてありがとうございます。

晴夏 きつと、私が悪い子だから……その罰なんだから、ずっと思ってた。

悠 ……悪いこと？

晴夏 お母さんがいつも「あなたのせいで貧乏になった」って……だからそのせいなんだって……。悪い子には罰があたるって、お母さんが……。

悠 そんなことありません！

声を荒げ、立ち上がる悠。

少しだけ、目を見開く晴夏。

悠 そんなことはありません！ そんなことを、思う必要もありません！ 悪いのは犯人です。砂山です。日向さんが……悪いなんてことは絶対にありません！ お母さまの言葉だつて気にする必要はないです。すべて、何もかも犯人が悪いんです！

肩で息をする悠。ハツとして我に返る。

晴夏は虚ろな瞳で悠を見つめている。

悠 ……大きな声を出してしまつて、すみません

落ち着きを取り戻した悠は椅子に座る。

晴夏 悪いことをしたの？

悠 え？

晴夏 誰か、ええと……あなたに悪いことをした人がいるの？

晴夏は悠の顔をまっすぐにのぞき込む。

悠 どうして、そう思つたんですか？

晴夏 すごく怒つてたから。

悠 それは……晴夏さんは悪くないってことをわかつてほしかったからです。びっくりさせてしまいましたね。すいません。

晴夏 違う。私じゃない誰かに……怒つてた。

晴夏から顔を背ける悠。

悠 今日は……今日の所はここまでにしましょう。

晴夏 ……終わり？

悠 はい。今日はもう終わりです。日向さんに負担をかけるわけにはいきませんので。

悠はテーブルの上に広がっている菓子をビニール袋に入れ始める。  
袋の口が開いているものが、床にこぼれるが、お構いなしに袋に入れる。

悠 これ、持って帰って食べてください。この中には、きっと日向さんの気に入るお菓子が  
あると思います。

悠は袋に入れ終わったお菓子を強引に晴夏に渡す。

晴夏 あ……うん。

悠 次は……そうですね、一週間後でいかがですか。疲れたんじゃないですか？ 今日  
はゆっくり休んで下さい。

晴夏 ……うん。

悠 何かあったら、遠慮せずすぐに連絡くださいね。困ったことがあったら、何でも力  
になります。

悠は机の上に広げたノートをかばんにしまう。

その後、かばんを片手に立ち上がるが、晴夏は立ち上がらない。

悠 もちろん、何の用事もなくなつて、大丈夫ですよ。寂しいとか、話し相手が欲しい  
とか、そんな理由でも電話してくれていいんです。私をお姉ちゃんだと思ってください  
い。私も日向さんのことを妹のように思いますから。

晴夏 ……ずっと……お話していいから……相手がいなかったら……話をするのは……  
……苦手です。

悠は扉の前まで行き、ドアノブに手をかける。

悠 さあ、行きましょか。日向さん。

悠は扉を開けるが晴夏は動かない。

溶暗。

## 二場

人ごみの音。その音の中にクリスマスソングが混じっている。どうやらショッピングモールのようだ。

店内は明るく、活気に満ちている。

舞台中央に悠が立ち、静かに語り始める。

**悠** 九年という月日は、何もかも忘れてしまうには十分な時間なのでしょいか。あの事件が起きたのは私が高校二年生の秋でした。日向さんが誘拐された事件の数カ月後のことです。被害者は十五人。うち死亡したのが七人。その中に父と母、そして妹がいました。

突然、絹を裂いたような悲鳴が響き渡る。

全ての音が消え去る。

静寂のなか、悠はゆっくりと辺りを見渡す。

**悠** 最初、何が起こったのかまったくわかりませんでした。日曜日、家族みんなで買い物に出かけたショッピングモール。あの男とすれ違ったその瞬間、突然、父が倒れました。次に母も倒れました。切り裂くような悲鳴が聞こえる中、妹に振り下ろされるナイフがスローモーションで見えました。

悠、目の前にまるで妹がいるかのように目を見開き、立ち尽くす。

まるで金縛りにあっているかのように、動きたくても動けない。

**悠** 私は何が起きたのかを理解できず、ただ見ていることしかできませんでした。あの男、岩田の持ったナイフが、まるで吸い込まれるように妹の胸に沈んでいきました。妹は何が起こったかわからない、キョトンとした目で私を見ていました。妹が何かを言おうと口を開いたけれど、その口から出たのは言葉ではなく、真っ赤な血でした。崩れ落ちる妹を、私はただ見つめるしかできませんでした。それはあまりにも突然の出来事で、私にとってはまるで現実感がなく、白昼夢の中にいるようでした。

悠は崩れ落ちた妹の幻影を見つめている。

**悠** 妹を殺した岩田が、私の方へ向かってきました。しかし、私を殺すことなく、岩田は私のすぐ後ろにいた男を殺しました。父と母、そして妹の血が地面に広がっていくのを見つめながら、私はただ、立ち尽くすことしかできませんでした。あの時の風景は、今でも瞼の裏に焼き付いたままです。すれ違う時に私を見た岩田の目。崩れ落ちる瞬間まで私を見つめていた妹の目……。どれだけ時が流れようと、脳裏から消えることはありません。

悠は血を流しながら倒れ伏した家族を、幻覚の中で見ている。

呼吸がどんどん早くなっていく。  
呼吸の速度が頂点に達し、そのまま絶叫へと変わる瞬間に照明が切り替わる。  
暗転。

明かりが点くと、そこは取調室。

中央に置かれた机をはさんで、晴夏と悠が座っている。

悠の前にはノートが広げられていて、何かを書きつけている。

晴夏は窓を見つめたまま動かない。

やがて悠はペンを置き、ノートを閉じる。

悠 では、これで調書は終了になります。長い間、お疲れ様でした。ありがとうございます。  
した。

晴夏 あっ……はい。

悠 本当に話してくれてありがとうございます。事件の全てが解明されたわけではないですが、わかったことはたくさんありました。一カ月半という長い間ご協力いただきましてして、本当にありがとうございます。

悠は椅子から立ち上がって、晴夏に頭を下げる。

晴夏はどうしたらいいのかわからない顔をしている。

頭を上げた悠は再び椅子に座る。

悠 日向さん、そろそろ新しい生活にも慣れてきましたか？

晴夏 わからないことだらけ。失敗ばかりです。

悠 それでいいんです。みんな失敗を繰り返して成長していくんです。少しずつ、少しずつ、前進していけばいいんです。焦る必要なんかないですよ。

晴夏 みんな、同じことを言う。

悠 それしか方法がないからなんです。なくした時間は取り戻せないけど、日向さんにはまだまだ未来があります。

晴夏 ……未来なんて言われても……まだ、よくわからない。

悠 ゆっくりと、日向さんのペースでいってことです。

晴夏 うん。

悠 ……あの、日向さん。私からの提案なんですけど、これからはカウンセリングも兼ねて、定期的にお会いしませんか？ ソーシャルワーカー含め、上の許可はすでもらってありますので、あとは日向さんのお返事だけです。

晴夏 カウンセリング？

悠 そうです。今日までは刑事と被害者という関係でしたが、これからはもっとフランクに、友人とまではいかなくても、それに近い関係でお話していききたいんです。

晴夏 ……。

悠 前にも言ったと思いますけど、私、臨床心理士の資格を持っているので、カウンセリングもできるんです。できるだけ日向さんの力になりたいんです。迷惑だったら断って

くれてかまいません。

晴夏 話って……何を話すの？

悠 内容はなんでもいいんです。決まりなんてありません。定期的に会って、その時思ったこと、印象に残った出来事なんかを話してくれればいいんです。

晴夏 ……むずかしそう。

悠 言い方が悪かったですね。何も考えずに、ただ世間話をしましうってことです。

晴夏 それが……カウンセリング？

悠 カウンセリングという大義名分を掲げて、私がただ、日向さんと会っておしゃべりがしたいというだけなんです。私と会っておしゃべりをするのは嫌ですか？

晴夏 ううん。嫌じゃない。

悠 じゃあ、カウンセリングのお話。受けていただけますか？

晴夏 私は……毎日、やることもないから……。お話するのは大丈夫。

悠 ありがとうございます。じゃあ、まずは週に一回のペースでいきましょう。状況をみて月に一回、三カ月に一回と、ペースを伸ばしていきます。場所は……ここじゃない場所がいいですよ？

晴夏 ここが……ここがいい……です。

悠 え？ でも。

晴夏 ここは使っちゃだめなの？

悠 ダメではないですけど……。ここは取調室なんです。こんな殺風景な場所でもいいんですか？ カウンセリングというのは、もっとリラックスした場所で行うものなんですよ。

晴夏 ここ、落ち着きます。

悠 わかりました。ここでカウンセリングできるように手配します。

悠は机の上のノートとペンをカバンにしまう。

晴夏 ……橘さんは、どうしておまわりさんになったんですか？

悠 え？

晴夏の質問に、少し驚く悠。

悠はおもむろに椅子から立ち上がり、窓を見上げる。

悠 私ね、両親と妹を殺されているの。通り魔による無差別殺人で。

晴夏 え？ 殺された？

悠 そう、殺されたの。理由もなく、突然に。

晴夏 ……ごめんなさい。

悠 日向さんが謝るようなことじゃないわ。事件から九年。犯人はすでに死刑になってこの世にいないわ。

晴夏 九年……。

悠 そう。日向さんが誘拐されて、数カ月後に起きた事件だった。

晴夏 知らなかった。

悠 はじめは傷を負った心をどうしたら癒すことができるのかと、心理学を勉強して、そ  
つち方面を目指していたんだけど……。ある日、傷を癒すよりも、傷を負わないことが  
大事なのでは……。私たちがみたくない不幸な人間をこれ以上増やさないようにしなくちゃ  
って思ってた、それで、私は警察官になったの。

晴夏 私たち……。私たちが不幸なの？

晴夏の言葉に、ハッとする悠。

悠 ごめんなさい。そんなつもりで言ったわけじゃないんです。

晴夏 やっぱり……。不幸なんだ。

悠 これは、言葉のあやなんです。

晴夏 大丈夫。私もだんだん、わかってきたから……。

悠 ……その。

晴夏 変なことを聞いて、ごめんなさい。

悠 ……いえ、そんな、こちらこそ。気にしないでください。

晴夏 じゃあ、もうひとつ聞いていいですか？

悠 ……どうぞ。

晴夏 犯人が死んで、どんな気持ちだった？

悠 ……。

晴夏 私は……。あいつが死ぬ瞬間をこの目で見た。……。何も感じなかった。泡を吹いて倒  
れているあいつを、私はただ黙って見えた。

間。

悠 私は……。私は、終わったと思った。

晴夏 ……終わった？

悠 家族を殺されて、最初は悲しみしかなかった。毎日泣き続ける日々。次に怒りがきた。

犯人への、岩田への怒り。それはすぐに憎しみに変わった。ただ「むしゃくしゃして  
いた。誰かを殺したかった」という身勝手な理由だけで、私の大切な家族を奪った岩田を  
憎くて、憎くて、殺せるものなら、自分の手で殺してやりたかった。そして……。

晴夏 そして？

悠は大きく深呼吸をする。

悠 死刑が確定し、異例の速さで執行された。あいつが死んだとき、私の憎むべき相手は  
この世から消え去り、いなくなつた。

晴夏 そいつが死んで、すっきりした？

悠 ……どうなんでしょうか。死刑執行を知らされても、晴れやかな気持ちにはならな  
かつた。ただ、憎むべき対象がいなくなつたことによって、私の中で何かが終わった。死  
刑になつたことで、確実に何かはわからないけど区切りがついたことだけは確かです。



晴夏 ……うん  
悠 ずいぶんと話し込んでしまいましたね。もう帰りましょう。

悠は立ち上がり、扉へと向かう。  
晴夏は椅子から動こうとはしない。

晴夏 橘さんの傷は…もうなおったの？

ドアノブに手をかけた状態で、悠は立ち止まる。  
悠はゆっくりと、晴夏のほうを振り返る。

悠 そうですね、私の傷はもう癒えたと思います。傷は時間が経てば、いつかは癒える。でも…。

晴夏 でも？  
悠 傷跡はなかなか消えない。

溶暗。

舞台の隅に悠の部屋が現れる（上下どちらでもよい）。  
狭いワンルームにはパイプベッドと小さな机のみ。  
勤務を終えた悠が部屋に戻ってくる。  
スーツ姿のまま倒れこむようにベッドに転がる。  
目を閉じてじっとしているが、呼吸が徐々に早くなる。

悠 ……！

飛び起きる悠。  
顔は青ざめ、全身は汗で濡れている。  
起き上がり、机の上に置かれた写真を手に取る。

悠 忘れることなんて……できるわけがない。

写真を見つめる悠の顔は、苦しそうに歪んでいる。  
溶暗。



三場

場所はどこの遊園地。

平日の昼間なので人は少ない。

舞台中央にはベンチが置かれている。

そこへ悠が小走りにやってくる。

悠 あー、楽しい。こんなに遊園地が楽しいなんて。正直、予想外だったわ。

ベンチに腰をおろす悠。

悠 高校一年生以来か……。なんか不思議な気分。

遅れながらも歩いてきた晴夏が、悠のとなりに座る。

悠 日向さん、どう？ 楽しんでる？

晴夏 ……はい。

悠 ごめんね。日向さんに楽しんでもらおうと思って連れてきたのに、なんか私のほうが楽しんでるみたいで。

晴夏 いえ。楽しそうな橘さんを見ているのは、楽しいです。

悠 のりたいものとかあったら、何でも遠慮しないで言っつてね。平日だから、並ばなくていいのもいいわよね。

晴夏 それ、聞き飽きました。

悠 だって、日向さんが何もわがままを言っつてくれないから。遊園地初めてなんでしょ？

晴夏 うん。

悠 それを知ったとき、何としても連れて行ってあげたいって思ったんです。

晴夏 まだ……。外に出ちゃダメって言われてるのに……。大丈夫？

悠 きちんと許可をもらつての外出ですから、安心してください。刑事である私が日向さんの安全を保証することを条件に、許可をとつたんです。正直、ちよつと大変でした。

晴夏 ここは、危ないところなの？

悠 そんなことはないの、安心してください。楽しいところです。

晴夏 じゃあ、なんで？

悠 日向さんには、まだ刺激が強すぎるかもしれないって話です。もっとゆっくりと社会に馴染んでいくべきじゃないかって、施設の先生は言っつていました。でも、ずっと施設の中にいたんじゃ、日向さんだつて息が詰まりますよね。

晴夏 ……うん。

悠 よかった。そう言っつてくれて、嬉しいです。苦労したかがありました。これは内緒の話ですけど……。

晴夏 なに？

悠 経費を使っつて遊園地で遊べるという下心がなかったかと言えば、嘘になります。

晴夏 けいひ？  
悠 こつちの話。冗談です。気にしないでください。

晴夏は羽織っているコートの前を、寒そうに重ねる。

悠 もしかして、寒いですか？ 雨こそ降らないけど、今日は陽が出てないから。

晴夏 ……大丈夫。寒くない。

悠 寒かったらどこか建物の中に入りましょう。もう十一月ですから、寒いのも当然ですよね。

晴夏 寒いのは、我慢できる。本当に寒くない。大丈夫。

悠 それならいいんですけど……さて、次は何にのりますか？ アトラクション系はひと通り乗りましたけど、もう一度乗りたいものはありましたか？

晴夏 ……ないと思う。

悠 遠慮しないでいいですよ。何度だって付き合いますから、私。

晴夏 橘さんは何かないの？

悠 私のことはいいいんです。今日は日向さんが主役なんですから。それに私は十分に楽しんでます。

晴夏 ……うん。

悠 あと二時間は遊べますから、せっかくなんで思いっきり満喫しましょう。

晴夏 うん……でも、少し座っていたい。

悠 わかりました。ここで、少し休憩しながら、次に何をやるかかんがえましょう。

ふたり、ぼんやりとベンチに座る。

悠はスマホを見たりして、なんだか落ち着かない。

晴夏はゆっくりと悠の方を見る。

何か言いたそうに口を開くが……。

晴夏 橘さん、私……。

悠 あっ、そうだ！ そういえば、揚げパン食べてないですよね。この遊園地、揚げパンの屋台が美味しいって評判なんです。すぐそばにあるはずですから、私ちよつと買ってきますね。

立ち上がる悠。

晴夏 ……お腹、まだそんなに減ってないです。

悠 大丈夫です。そんなに量は多くないはずですので。食べきれないなら持って帰ればいだけですから。ここで待っていて下さい。すぐに戻ってきますから。絶対に動かないで下さいね。

晴夏 ……わかった。

悠は軽快な足取りで走っていく。

晴夏はひとり、じっと座って道行く人たちを眺めている。

そこへ男1・2が現れる。

男1 あれ、ひとりなの？ さっき見たときは、連れの子がいたよね。

男2 トイレでも行ってるのかな？

晴夏は男たちを横目で見たあと、下を向いて目を合わせないようにしている。

男1 平日のこんな天気じゃ、誰も女の子なんていなくてさ。

男2 遊ぶ相手がいなくて困ってたんだよ、俺たち。

男1 よかったらさあ、俺らと一緒に遊ばない？

男2 ごはんぐらいなら御馳走するからさあ。ねえ、どう？

晴夏 ……。

男1 ねえ、ねえ、無視しないでよ。

男2 俺たち、別に怪しいものじゃないからさ。ただの暇な大学生。

男1 N大って知ってるでしょ。その学生なの俺たち。

男2 疑うなら、学生証を見せたっていいぜ。

晴夏 ……。

男1 ねえ、こっちぐらい見てもいいんじゃない？

男2 ちよっと可愛いからってさあ。その態度はないんじゃない？

男1 ねえねえ。少しは顔を上げてくれよ。

男2 おい、聞いているのかよ？

男2、晴夏の手を掴む。

手を掴まれても晴夏は下を向いたまま動かない。

男1 (男2に) 手荒なまねはよせよ。

男2 うるせえ。ずっと無視しやがって。

男1 はなしてやれよ。怖がってるじゃん。

男2 嫌なら、ひとこと嫌って言やあいんだよ。無視しやがって。

晴夏の呼吸がどんどん荒くなる。やがて、

晴夏 い…いや！

大きくはないが、悲鳴を上げる。

そこへ悠が戻ってくる。手には揚げパンを持っている。

悠 ちよっと、何してるの、あなたたち！

悠の剣幕に慌てて手を話す男2。  
震えている晴夏に悠は寄り添う。

悠 日向さん、大丈夫？ ごめんなさい。まさか私がいなくなった隙に、こんなことにな  
るなんて。

男2 大げさなんだよ、こいつ。ちよつと手を掴んだだけなのによお。

男1 もういいから。行くぞ。

悠 今すぐ私の前から消えなさい。さもないとしよつ引くわよ。

悠はジャケットのポケットから警察手帳を取り出す。

男2 まじか……。

男1 ほら行くぞ。失礼しました。

男1、男2を連れて退場。

晴夏は肩を震わせながらベンチに座っている。  
やがて落ち着き、顔を上げる。

晴夏 もう、大丈夫……。ちよつとだけ、あの男を思い出ただけだから……。ごめんなさ  
い。

悠 日向さんをひとりにした、私の責任です。日向さんが謝ることなんて何もありません。  
晴夏 ……でも。

悠 やつぱり、遊園地は少し早かったかもしれません。いずれにせよ、無理に連れ出した  
あげく、日向さんを怖い目にあわせてしまったのは、全て私の責任です。

晴夏 大丈夫。もう、大丈夫だから……。

何かを懇願するかのように、晴夏は悠の手を握る。

悠 まだ時間がありますが、今日はもう帰りましょう。いいですか？

晴夏 うん。

悠 せっかく楽しかったのに、最後の最後で台無しになってしまいましたね。

晴夏 大丈夫。楽しかった。

悠 落ち着きましたか？ もう、立てますか？

晴夏は悠より先に立ち上がり、悠を見下ろす。

晴夏 橘さん、実はお願いがああるの。

悠 ……どうしたんです、改まって。

晴夏 私、施設を出たい。自分ひとりで暮らしたい。

悠 こんなことがあった後なのに……。それは……。まだ早いんじゃないですか？

晴夏 最近、ずっと考えていた。お願い。ひとりで暮らしたいの。

悠 ……どうして、そんなに施設が出たいんですか？ もしかしてイジメる人や、どうしても会いたくない人がいるんですか？

晴夏 ううん。大丈夫。施設の人たちはみんなとても親切。でも……。

悠 でも？

晴夏 あそのこの生活は、前の生活とあまりかわらない。鎖でつながれた生活と……。鎖がないだけで、ずっとつながれている感じがする。

悠 それは……。気持ちわかりますが……。

晴夏 私には、無理？

悠 それは……。なんとも言えません。日向さんに一日でも早く社会復帰してほしいという気持ちに、嘘偽りはありません。でも、できるかどうかは……。やってみないとわからないことだと思います。

晴夏 いつも、失敗しながら進めばいいって言ってくれた。

悠 それは、そう言いましたけど……。施設の先生はなんて言ってるんですか？ 何か相談しましたか？

晴夏 うん。この前、施設の先生に言ってみた。そしたら、あなたは誰も家族がいなかったら、身元？ を保証してくれる人がいないから難しいって。橘さんがいいって言えば、何とかなるかもしれないって。そう言われた。

悠 そうですか。だから私に……。

晴夏 私、何でも言うこときくから……。お願い。

悠 日向さんの気持ちはわかりました。何とかできないか、上に相談してみます。日向さんの力になるって言いましたから。私にできることはなんだったってします。

晴夏 ……ありがとう。

悠 相談してくれて、嬉しかったです。これからも遠慮せず、困ったことは私に言って下さいね。なんてったって私は日向さんのお姉ちゃんですから。

晴夏 ……うん。ありがとう。

悠は晴夏に手を差し出す。

晴夏に手を握られながら、悠はベンチから立ち上がる。

悠 さあ、帰りましょう。

遊園地の楽しそうな音が響き渡る。

溶暗。

舞台の隅に晴夏の部屋があらわれる。

パイプベッドに机がひとつ。

悠の部屋とよく似ている。

電気も点けず、真つ暗な部屋の中で、晴夏は立ちすくんでいる。  
やがて、晴夏はゆっくりとベッドに腰を下ろす。

**晴夏** これが……自由。

晴夏はベッド倒れこむ。

**晴夏** ……何も変わらない。

溶暗。

## 四場

取調室。

部屋の中央に置かれた机の前に、晴夏がひとり座っている。

晴夏の座る椅子の背にはコートがかけられている。

扉が開き、悠が入ってくる。

悠は厚手のコートにマフラーを巻き、手には大きな紙袋を持っている。

悠 ごめんなさい。遅くなっちゃった。

晴夏 こんにちは。橘さん。

悠 ごめんね、だいぶ待ったでしょ？

晴夏 いえ、そんなことないです。

悠 ほんとごめんなさいね、自分から時間の指定をしておいて。現場から向かう道が事故で渋滞しちゃって。ただでさえ混む道なのに、ここに事故が重なったから、もう全然動かなくて。

晴夏 気にしないでください。私と違って、橘さんは忙しい身ですから。なんなら、今月はなしにしてもよかったですよ。

悠 寂しいこと言わないで。一カ月ぶりに日向ちゃんと会うのを楽しみにしていたんだから。

晴夏 私も……橘さんに会えるのを楽しみにしてました。

コートとマフラーを脱ぎ、息を整えてから、悠は椅子に座る。

悠 そうそう、コーヒー買って来たわ。このコーヒーは私のお勧めなの。あつ、日向ちゃんもコーヒー飲めたかしら？

晴夏 いちおうこれでも二十歳越えてますから、子供扱いはそろそろやめてください。でもブラックは無理。甘いのなら、大丈夫です。

悠 そう言うと思って、日向ちゃんにはキャラメルマキアート。

悠は紙袋の中から、コーヒーを取り出して、晴夏に渡す。

晴夏 ありがとうございます。いただきます。

悠 私は、小倉抹茶カプチーノ。小倉抹茶を入れたコーヒーなんですって。

晴夏 ……美味しいんですか？ それ？

悠 私も初めて飲むやつだから、どうかしら。けど、この店は何でもおいしいから。

悠は紙袋から取り出した自分のコーヒーを一口すする。

悠 うーん、美味しい。抹茶の苦みがコーヒーとマッチしてるわ。あとからくる小倉の甘味もいい感じ。日向ちゃんもひとくち飲んでみる？

晴夏 私は遠慮しておきます。

口のまわりに泡をつけた悠の姿を見て、穏やかな表情をする晴夏。  
晴夏も渡されたコーヒーをひと口すすする。

悠 どう？ 美味しい？

晴夏 美味しいと思えますが……とても甘いです。

晴夏は持っていたコーヒーをテーブルに置く。

悠 ……それで、最近はどうなのかしら？ 何か新しいことを始めたりした？

晴夏 ……ひとり暮らしを始めて二カ月。ようやく何となくわかってきた感じです。

悠 わかってきたって何が？ 掃除？ 洗濯？ 自炊の仕方？ そういえば引越した時に行ったきりになっちゃったけど、ちゃんと生活できてるの？ 困ったことやわからないことがあったら、電話してきていいのよ。

晴夏 ちゃんとできているのかはわかりません。でも何とか自分でご飯を作って、食べてます。買い物にもだいぶ慣れてきました。

悠 そう聞いて安心したわ。

晴夏 スーパーでいろんな食べ物を買って、手あたり次第食べてみます。美味しいもの、美味しくないもの、たくさん食べました。でも、いまだに私が好きだったものが何なのかは思い出せません。

悠 ……大丈夫。そうやって続けていく内に、すこしずつ形になっていくものよ。

晴夏 そうなんですか……そうなんです。橘さんも同じだったんですか？

悠 私？ 私は……私も同じね。急にひとりになってしまって、高校生だったから、そこまで社会のことを知っているわけでもなくって、それなりに大変だったわ。まあ、お金に困らなかつただけが救いよね。

晴夏 お金……。やっぱりお金ですか。

悠 もしかして、生活費、足りてないの？

晴夏 もらってるお金でなんとかなってます。ただ、いつかは自分で働いて、お金を稼がないと思うって……。そう考えると、自分に何ができるのか、ちゃんと働けるのか、不安になります。

悠 そんなの、まだまだ先でいいのよ。

晴夏 そうなんですか？ 自分がもう二十一歳なことに、どうしようもない不安をおぼえるときがあります。

悠 もしかして、誰かに働けって言われてるの？

晴夏 そんなことはありません。

悠 もし、そんなこと言うやつがいたら、私がぶん殴ってやるから。

晴夏 ただ、テレビとかインターネットとかを見るようになって、私が普通の二十一歳ではないということを、嫌でも思い知ります。

悠 ……ちゃんと眠れている？



晴夏 はじめは上手く眠れませんでした。静かな部屋にいとあの時を思い出しそうになるので……。でも、テレビを点けて寝ることを覚えて、今はよく眠れています。

悠 こういう言い方はよくないのかもしれないけど、十年という月日を失ったとしても、日向さんはまだ二十一歳なのよ。どうにだって人生を取り戻すことができるはずだわ。いえ、取り戻さないといけないし、取り戻させてみせるわ。

悠は持っていたコーヒーを飲み干す。

晴夏は目の前に置かれたカップを見つめている。

晴夏 そういえば、先週、同窓会があったんです。

悠 へえ、同窓会。でも、それって小学校の？

晴夏 そうです。私は学校は小学校しか行っていませんから。

悠 どうやって連絡がきたの？ もしかして、私が知らされていないだけで連絡を取ってた子がいたの？

晴夏 そんな子、いるわけじゃないですか。小学校の記憶は……霧がかかったようにあやふやで……もしかしたら仲の良かった子がひとりぐらいいたかもしれないませんが……今となってはわかりません。

悠 でも、同窓会、行ったんでしょ？

晴夏 はい。行きました。施設から連絡があり、小学校の同級生を名乗る人が連絡を取りたいといっているが、どうしたらいいかと。二週間前の話です。

悠 けっこう急に決まった話だったのね。

晴夏 はい。携帯番号を教えていいと言ったら、すぐに電話がかかってきました。その人がいうには、小学校時代、隣の席に座っていた子で、私とは仲がよかったみたいです。ニュースを見たときから、同窓会をしたいと思っていたって。でも、すぐには無理だから半年ぐらいは待とうって。それで半年経って連絡を取ろうと思ったら、連絡先が何もわからないことに気づき、いろんな所を聞いてまわったって。年末年始をはさんだこともあり、今までかかってしまったと言っていました。

悠 へえ。いい話じゃない。

晴夏 そう……ですね。私なんかに会いたがるなんて、変わってると思います。

悠 あら、じゃあ私は変わり者なのね。

晴夏 橘さんは特別です。

悠 ありがとう。誉め言葉と思っておくわ。しかし、連絡とってすぐに同窓会なんて、なかなかの強行スケジュールよね。

晴夏 その同級生曰く、善は急げということで、一週間後に同窓会をやることになりました。

悠 まあ、日向ちゃんの連絡先を探し出した行動力を考えれば、そういう性格の子なもの納得するわ。

晴夏 行ってみると、十人ぐらいの人が来ていました。

悠 へえ。よくそんなに集まったわよね。実は日向ちゃんはクラスで人気者だったんじゃない？

晴夏 当たり前ですけど、みんな大人で、すごく違和感を覚えました。でも、話しているうちにみんなはみんななのかな？ こういうものなのかな？ って思うようになりました。

悠 ……そう。

晴夏 頑張って、頑張ってたってたくさん言われました。なんで頑張らないといけなのかなって思いました。

悠 それはね、日向ちゃん、お友達も気を使って言っているだけなの。

晴夏 橘さんは頑張って生きてきましたか？

悠 ……頑張らないで生きている人なんて、世の中にいないと思うわ。

晴夏 頑張るってなんですか？ 私は何を頑張ればいいんですか？

悠 ……。

悠は上にある窓を見つめる。

外は曇っているのか、灰色の景色が広がっている。

晴夏 ある女の子が言いました。絶望しないでね。自殺なんかしないでねって。絶望してはいけませんか？ 自殺してはいけませんか？

悠 ……私はね、日向ちゃん。誤解しないでほしいんだけど…どうしても死にたいのならば、自殺してもいいと思ってる。

悠の言葉を聞いた瞬間、晴夏は少しだけ安心した顔をする。

晴夏 ……そうですね。そうなんです。

悠 日向ちゃんに死んだ方がいいって言ってるわけじゃないのよ。そこは誤解しないでね。

晴夏 はい。わかっています。

悠 絶望に負けることだってある。私も絶望のふちを見た人間だから、そのことがよくわかる。…あの事件のあと、一週間ぐらい経ったときかしら、私、死のうと思ったの。

悠は椅子から立ち上がり、部屋の中をあてどなく歩きます。

晴夏 でも、死ななかつたんですね。

悠 今、ここでこうやって日向ちゃんと話しているのが、その証拠よね。

晴夏 どうして…生きていこうと思ったんですか？ 私には今、どれだけ考えても生きている理由なんてないんです。生きていかなくはない理由がないんです。頑張る理由がないんです。

悠は立ち止まり、再び窓の方を見る。

悠 私はね……負けたくなかったの。犯人に。

晴夏 ……どういうことですか？

悠 あの日、カミソリを手首に当てたその瞬間、あいつの顔が思い浮かんだの。

悠は大きく息を吸い込み、晴夏を見る。

悠 身勝手な犯人のせいで、自分が死んでしまうなんて、負けだと思った。理不尽に歪められた私の人生は、どうやったって元には戻らない。だけど、だからこそ、これ以上あの男の好き勝手にはされたくないと思ったの。

晴夏 ……私には難しい話です。

悠 私が自殺するのは、間違いなくあいつのせい。あの男のせい。それはわかってくれる？  
晴夏 はい。

悠 あいつに人生を操らている。これ以上、そんなことはされたくない。だから死ぬのは負けなの。負けだと思ったの。

晴夏 負け……なんですか。

悠 そう。負けよ。

晴夏 でも生きるのが辛いなら、絶望しているなら、死ぬのもありなんですよ。

悠 確かに、そう思った瞬間もあった。でも私はそこから這い上がることができたの。死ぬのは負けだと思うことで、私は生きてこられたの。

晴夏 橘さんは、強いんですね。

悠 どうしたって生きていかなければいけないのなら、せめて運命に抗って生きていこうと思っただけよ。

晴夏 ……私には真似できそうにありません。私には生きる理由もないけれど、死ぬ理由もない。ただそれだけで、今、生きています。

悠 真似なんかしなくていい。日向ちゃんには日向ちゃんの生き方がある。それをゆっくと探せばいいと思うわ。

悠は再び椅子に座る。

悠 失くしたものは取り戻せない。だからせめて、前を向いて生きていくしかないのよ。

晴夏 何を失くしたのかすら……私にはまだわかりません。十年という時間だけが、私の失くしたものです。

悠 ある瞬間、ふとした瞬間にあの日のことを思い出す。そんなことは日向ちゃんにはないの？

晴夏 毎日のようにあります。でも、最近はだんだんと減っているように思います。

悠 ……そうなの。それはいいことだわ。

晴夏 この前、橘さんが言った、傷は時間とともに治るってことが、少しだけわかった気がします。橘さんの傷跡もいつか癒えるといいですね。

悠 何年経っても傷跡が疼く。どんなに忘れようとしても、ふとしたきっかけで、ほんの些細なことでも思い出してしまうの。

晴夏 ……ずっと痛みに耐え続けるしかないんですか？

悠 もしかしたら、傷跡もいつかは消えるのかもしれないけど……私にはわからない。す

くなくとも私の傷跡は消えることなく、疼きつづけている。

晴夏 ……死んでしまったほうが、楽そうですね。

悠 何度だってそう思った。でも、そのたびに、あいつと妹の顔が臉の裏に浮かび上がってくる。妹の……私をじっと見つめる顔が。あいつの、岩田の軽薄な笑みが。私の家族を殺したときに浮かべていた笑顔が！ 妹の無念を晴らすためにも、私はあいつに負けるわけにはいかないのよ！

悠はテーブルを叩く。

衝撃で晴夏の前に置いてあるコーヒーが倒れる。

こぼれたコーヒーが床に広がっていく。

晴夏 私には……橘さんの気持ちがよくわかりません。橘さんのような生き方はできません。

悠 ……それでいいの。……日向ちゃんは私のようにならないで欲しい。そのためのカウンセリングなんだから。反面教師として私を見てくれていいわ。

晴夏 私が間違っているのかもしれないけど……妹さんは……橘さんが苦しむことを望んでいないと思います。

悠 妹のことは関係ない。岩田に負けたくない……。あいつにメチャクチャにされた私の人生を取り戻したいだけなの。あいつに負けたくないだけなの。人生を踏みにじられたからって、自暴自棄になっていいわけじゃない。踏みにじられたからこそ、それを踏み台にして立派な人間にならなきゃいけないの。じゃないと、両親に……妹に合わせる顔がない。

晴夏 橘さんは立派な人です。負けてなんかいないと思います。

悠 ……ありがとう。でも、それは私が決めることであって、日向ちゃんが決めることじゃないの。

晴夏 ……そうなんですか？ 本当に？

悠 自分でもおかしなことを言ってるって自覚はあるの。

晴夏 どうすることもできないんですか？ 私にはゆっくり生きていけばいいって。失敗してもいいって言ってくれたのに……。

悠 日向ちゃんは日向ちゃん……私はこのように生き方しかできないの。

晴夏 どうしても？

悠 生きるって難しいわね。……今日はここまでにしませう。

悠は立ち上がる。

晴夏 コーヒー、こぼれちゃいました。

悠 もう、とっくに冷めてしまっていたし、本当は美味しいと思ってなかったでしょ？ ひと口飲んだきりだったんだから。

晴夏はじっと床に広がるコーヒーを見つめている。

溶暗。

晴夏の部屋。

ベッドの上以外にはゴミ袋が散乱しており、足の踏み場もない。部屋に戻った晴夏はコートをゴミの上に脱ぎ捨てる。シャツの腕をまくり、二の腕を露出させる。

二の腕には何本もの切り傷がある。

晴夏はベッドの脇に置いてある剃刀を手に取り、二の腕に当てる。

ゆっくりと剃刀を引くと、そこから血があふれだす。

自分から流れ出た血を、不思議そうな目で見つめる。

晴夏

血が流れても……私には、わからない。生きる理由なんて……私には難しすぎる。

剃刀を握りしめながら、立ち尽くす晴夏。

溶暗。

悠の部屋。

パイプベッドの上に悠が寝ている。

うなされているが、やがて飛び起きる。

悠

いったい……いつまで……私は苦しまなくちやならないの？

ベッドから起き上がり、机の上に置かれている睡眠薬を手取る。

無造作に錠取り出し、ペットボトルで飲み干す。

テーブルの上にある家族写真を手に取り、じっと見つめる。

悠

忘れるなんて、許されるわけがない。

悠は写真をテーブルに戻す。

悠

忘れてしまったら……自分が許せなくなる。

再びベッドに倒れこむ。

溶暗。

五場

取調室。

中央にあるテーブルをはさんで、晴夏と悠が座っている。ふたりとも春を感じさせる服装をしている。

テーブルの上にはチョコレートと缶ジュースが置かれている。

晴夏の前にはオレンジジュース。

悠の前にはブラックコーヒー。

晴夏 アルバイトを始めました。

悠 え？ あ、お、おめでどう。面接通ったのね。

晴夏 はい。橘さんのアドバイスのおかげです。履歴書の書き方や面接の受け方、教えてくれてありがとうございます。

悠 あの後、何の連絡もこないから、勝手に不採用だったと思い込んでたわ。

晴夏 結果を伝えなくて、すいません。

悠 いいのいいの。それより、面接、緊張したでしょ。

晴夏 それほどでもなかったです。私、自分で思ってるよりも、度胸があるのかもしれない。

悠 そうね。本番に強いタイプよね、日向は。面接では何聞かれたの？

晴夏 悠さんが予想してた通り、高校を卒業してから、今まで何をしていたのか聞かれました。

悠 私が教えたとおりに答えた？

晴夏 はい。「高校卒業直後に母親が病気で亡くなった。ショックでうつ病になり、働くことができなかった。だいぶ回復したし、いつかは働かないといけないから、まずはアルバイトからだと思って」と答えました。面接した人には「そうなの。大変だったね」と興味なさそうに言われました。その後は、給料やシフトの話で面接は終わりました。

悠 お姉ちゃんの言うことを信じて正解だったでしょ。

晴夏 でも……今更ですけど、本当にあれでよかったですか？ 嘘ですよ。私、高校なんて卒業どころか、行ってもいないし。ネットでは経歴詐称は犯罪で、クビになるって書いてありましたよ。

悠 大丈夫大丈夫。大学卒業の経歴詐称はバレるけど、高校は絶対ばれないから。私が教えた通り、通信制の高校を書いておいたんでしょ？ なら、絶対大丈夫。私が保証するわ。バレなきゃ犯罪じゃないのよ。

晴夏 橘さん、仮にも警察官がそんなこと言っているんですか？

悠 日向もまだまだ世間をわかっていないわね。十年間誘拐、監禁されてましたって言うたら、採用なんてしてくれないわよ。仮に採用されても、それは変な同情心や好奇心から。同僚からは変人としか見られないわ。これは、私が身をもって経験したこと。真実がいつも正しい方向に働くとは限らないのよ。

晴夏 でも……なんか、釈然としないです。私は別に何か悪いことをしたわけじゃないですよ。

悠 もちろん、日向は何も悪くないわ。それは私だってそう。世の中って、全てがいい悪いでできてるわけじゃないの。

晴夏 そこらへんのさじ加減は……自分で覚えていくしかないですな。

悠 経験者としてのアドバイスはできるから、わからないことがあったら何でも聞いて。基本的なことは「会話は自分からしない。相手に合わせて相槌を打っておけばOK」「相手にプライベートな質問をしない。なぜなら自分も質問されるから」……そんなことかな。

晴夏 私……もともと他人に興味がないので、そこらへんは大丈夫です。自分から話しかけるのだって苦手ですし。

悠 日向の性格が、ちよつと羨ましいわ。私は頑張ってコミュニケーション取らなきゃって思ってる、それでいろんな失敗をしてきたから。つつい、よけいなことまでしゃべっちゃうのよね、私は。

晴夏 なんか、想像できます。

悠 それで、何の仕事にしたの？ 私がすすめた食品工場の仕事にした？

晴夏 求人誌とにらめっこして、いろいろと考えた末に、スーパーマーケットのレジ打ちにしました。

悠 ……スーパーにしたのね。別に日向の選択にケチをつけるつもりはないけど、社会復帰第一歩としてはハードルの高い仕事のような気がするわ……。食品工場のベルトコンベア仕事だったら、与えられた役割を淡々とこなすだけだから、コミュニケーションも必要最小限でいいから、楽なんじゃない？

晴夏 橘さんのアドバイスはもつともだと思えますが、私としては、少し冒険してみたかったんです。でも居酒屋なんかの接客業は無理だと思いました。ですの、その中間をとってスーパーマーケットのレジ打ちを選び、見事採用されました。

悠 そっか。日向が考えて選んだことなら、私は応援するわ。でも、けっこう大変だと思わよ。

晴夏 自分でも驚いています、何とかやっています。

悠 え？ もう働いてるの？ そっか、そうよね。

晴夏 働き始めて、昨日でちょうど一カ月が経ちます。ミスをしたり、お客さんから怒られたりすることもあります、クビになつてはいません。

悠 もっと早く教えてよ。先月会えなかったら、そんな重要なこと、電話してくれてもいいんじゃない。

晴夏 すいません。働き出したころは、慣れないこともあり、帰ってきたらそのまま寝てしまっていたので。

悠 そっか。そうよね。人生で初めて働くんだもんね。疲れるわよね。私も働き始めた頃はそうだったわ。

晴夏 橘さんでも、そんなだったんですね。ちよつと安心しました。

悠 もう、社会復帰したも同然ね。

晴夏 実は……言わなかったことには、もうひとつ理由があります。これをきっかけに橘さんにできるだけ頼らないようにしていこうと思ってるんです。

悠 え？ どうしたの急に。

晴夏 もちろん、橘さんのことが嫌いになったわけじゃありません。本当のお姉ちゃんのように感じています。でも、ずっと橘さんに頼って生きていくわけにはいきません。アルバイトを始めたことをきっかけに、できるだけひとり考えて、生きてみようと思っただけです。年齢的にも自立するべきですし……。

悠 最近じゃ、四十、五十になっても親のスネかじってるやつはいるみたいよ。もっと気軽に考えてもいいんじゃない？

晴夏 こんなこと言っただけじゃないと思います。不退職の決意で言っているわけではありませぬ。ただ、少しだけ強い気持ちを持っていないと、私はすぐに流されてしまいうだから……。

悠 不退職の決意なんて、難しい言葉を日向が使うなんて……（涙ぐむ真似）。

晴夏 茶化さないでください。

悠 日向の気持ちはわかったわ。寂しいけど、応援する。でも、何か困ったことがあったらすぐに相談してね。

晴夏 はい。そのつもりです。橘さんは……私にとって、唯一の家族ですから。

悠 ああ、これが子供が離れていく時の親の気持ちか。

晴夏 親子ではなく、姉妹の設定ですよ。

悠 設定なんて、ロマンのない言い方しないで。それで、仕事はどんな感じなの？

晴夏 レジ以外にも、暇な時は商品補充の手伝いやバックヤードの手伝いなんかをしています。初めてなのもありますが、覚えることがたくさんあって大変です。

悠 頑張ってるじゃない。楽しそうじゃありません。

晴夏 楽しいのはわかりませんが、仕事は何かこなしています。一カ月しか働いていないけど、働く喜びというものはなんとなくわかった気がします。

悠 おお、大人な発言。私ですらまだ働く喜びなんてわからないのに……。お友達はできた？

晴夏 友達なのかはわかりませんが、同じバイトの人とは良く話します。というか、話かけられます。私はいつも黙って聞いているだけです。なんだか私は話やすいそうです。

悠 そうそう。それがベストの対応なのよ。

晴夏 ちょっと変わると言われますが、あとは普通に接してくれます。

悠 ね。いちいち被害者なんて言わなくていいのよ。黙ってれば何もわからないんだから。

晴夏 あと、色んな人がいることを知りました。お客さんにも、従業員にも。

悠 スーパーには色んな人が来るもんね。

晴夏 色んな人と話をしました。若い人、年の人、男の人、女の人、みんな気軽に自分のこと話していくのは驚きました。店長は離婚していること。バイトの高橋さんは借金で会社がつぶれかけていること。女子大生の如月さんは彼氏とラブラブなこと。最年長の木村さんはいつもお孫さんの話ばかりです。

悠 ほんと、うまくやっているみたいね。

晴夏 ……はい。いろんな人たちの話を聞いて、生きる理由なんて具体的なものがなくても生きていけることがわかりました。

満足そうにうなづく悠。



悠 夢や希望なんて幻想なのよ。誰もがどうしても叶えたい夢を持って生きているわけじゃないの。そんなもののメディアが刷り込んだ幻想なの。日々の暮らす糧を得るために働き、些細なことで一喜一憂するのが……理想の人生なの。私はそう思うわ。

晴夏 ……そうなのかもしれない。

悠 はあ、安心したわ。この調子だとカウンセリング終了の日も近そうね。働きたいって言い出した時には、正直、まだ早いんじゃないかと思っただけ。案ずるより生むが易いってやつね。

晴夏 カウンセリングがなくなるのは……寂しいです。

悠 お世辞でも嬉しいわ。これからはただの友達として会えばいいだけ。私たちの関係性は変わらないわ。

晴夏 そうですよ。

悠 それに、カウンセリングは……いつまでも続けるものじゃないんだから。傷が癒えたら終わるもの。

晴夏 傷が癒え……傷跡も消え、痛みもなくなったらそれで終わるんですね。何もなかったことになるんですね。

悠 そうね……そうかもね。

晴夏 私、橘さんに少しお話ししたいことがあります。

悠 何？ 急に改まって。

晴夏 働き始めて、色んな人の話を聞きながら、私はあることに気づきました。

悠 あることって？

晴夏 みんな一緒なんだったことです。

悠 ……ちよつとよくわからないわ、日向。もう少し具体的に説明して。

晴夏 みんな同じなんです、私たち。傷跡の大きさに違いがあるだけで、みんな傷跡を抱えて生きている。店長だって離婚してから心に大きな穴が開いたって言っていました。

悠 みんな同じって……。私の事件を離婚なんかと一緒にしないで。いくら日向でも言う方がいいことと悪いことがあるわよ。

悠 はテーブルに置いてあるチョコレートをひとつ、無造作に口へ放り込む。

晴夏 女子大生の如月さんは彼氏とラブラブだけど、家にはアル中のお父さんがいて最悪だって。借金に苦しむ高橋さんはいつも眠そうな顔して会社が終わったあとに働きの来ています。

悠 ……みんないろんな人がいて、色んな事情がある。私だって、それくらいのは知っています。

晴夏 みんな許せないものや傷を抱えて生きているんです。

悠 そんなこと私だってわかってるわ。

晴夏 じゃあ、どうしてみんな笑って生きているんですか？ 橘さんはどうしてそんなに苦しそうに生きているんですか？

悠 は？ 私だって笑って生きているわよ。笑っていないのは日向のほうよ。

晴夏 ……そうですね。私はまだ上手に笑うことができません。  
悠 ほら……。私なんかのことより、もっと自分の心配をしなさい、日向。

下を向いて拳を強く握る晴夏。  
悠は缶コーヒーを傾ける。

悠 ごめんなさい。ちょっと強く言い過ぎたわ。でも、日向がこんなにもしっかりと自分の考えを持つようになったなんて……私、感動しちゃった。いつの間にか大人になったのね。

悠は椅子から立ちあがって、手を上げて喜びのポーズをする。

晴夏 橘さん……自分を許してあげて下さい。

悠 え？

晴夏 自分自身を許すことが、私には、私たちには必要なんです。

悠 ……。

晴夏 どうしたら傷跡が癒えるのか、ずっと考えてきました。傷は時間が経てば癒えます。でも傷跡は消えない。疼きもおさまらない。傷跡の疼きを消すためには、自分自身を許すしかないんです。

悠は缶コーヒーを取ろうと手を伸ばすが、滑らせて床に落としてしまう。

大きな音をたてて転がっていく缶コーヒー。

呆然とした表情で、悠は転がる缶コーヒーを目で追う。

悠 ……日向は、自分自身を許しているの？

晴夏 私は……私も、まだできません。でも、許していこうと、許せるようになろうと思っ……。

悠 私には無理よ！

突然の叫び声に驚く晴夏。

晴夏 ……橘さん？

悠 私にはできない。そんなことは、そんなことはできない。絶対にしたくない！

手負いの獣のように、悠は壁際へと下がっていく。

悠 私にはあの男を許すことなんてできない。自分を許すことができない。あの男の笑みを忘れることができない。妹が私を見る目を忘れることなんて……できるわけがない！

晴夏 橘さん……いつまで犯人と戦うんですか？ 犯人はもう、この世にいないんですよ。

悠 私は、負けるわけにはいかないのよ。

晴夏 負けたっていいじゃないですか。だいたい、負けるって、何に負けるんですか？ その勝ち負けって、橘さんが勝手に決めているだけなんじゃないんですか？ そうやって、自分を縛り続けて、それでどうなるんですか？ 家族だって橘さんのそんな生き方を望んでいないはずですよ。

悠 黙って！ わかったような口をきかないで！

晴夏 自分を苦しめるような生き方なんて……橘さんが前に言っていた、犯人の手のひらの上で踊っているのと一緒にじゃないんですか？

悠 ……うるさい。

晴夏 私はせめて橘さんに……。

悠 あんたとは違うのよ！

悠はテーブルに置かれたチョコレートと缶ジュースを叩き落とす。

悠は上から晴夏を睨みつける。

晴夏はまっすぐに悠の視線を受け止める。

悠 あんたは家族を殺されたわけじゃない！ 時間と処女を奪われただけ！ 私は失くしたの！ 父を、母を、妹を！ 二度と戻っては来ない！ あいつが、あの男が私から奪い去っていったのよ！ もしかしたら、助けられたのかもしれない！ 妹だけでも助けられたかもしれない！ でも、わたしは助けなかった。何もできなかったのよ！ そんな自分が許せない。許すことができない！

晴夏 ……橘さんの言う通りなのかもしれない。母は死んでしまったけど、それも病気です。私は時間と処女以外、奪われてはいません。

悠 私は……私だって、このままじゃダメだって、わかっている。自分が壊れていることは……日向に言われなくても、自分が一番よくわかっている。

晴夏 ……ごめんなさい。

悠 今まで、いろんなことを試してきたわ。でも、この怒りの炎はきえることなく、くすぶり続けている。精神科医の診察も、大量の睡眠薬も……心理学なんて、どれだけ学んでも何の役にも立たなかった。

晴夏 ……。

悠 でもある日、アルバイト先で偶然だけど万引き犯を捕まえたの。その時、なぜか一瞬、胸の中のかえてたものがスツと軽くなったような気がした。炎が一瞬でも弱くなった気がした。もしかしたら私に必要なのは自分の心と向き合うことじゃなくて、社会を直すことなんじゃないか。社会をよくしていけば、自分の心もよくなっていくんじゃないか……そう思ってしまった。それから心理の授業なんかそっちのけでひたすら公務員試験の勉強。そして警察官になり、刑事になった。悪い奴を捕まえて、世の中を良くしていく。そうすれば、妹に許してもらえるかもしれないと思った。悪いやつらを捕まえ続けられれば、いつかは痛みが消えるかと思った。でも……。

晴夏 ……ダメだったんですね。

悠 刑事になっても、まともに眠れた夜なんて、数えるほどしかないわ。  
晴夏 そうなんです……苦しむ橘さんを見るのは、私も苦しいんです。

悠 日向は、優しい子ね……。私のことなんて気にする必要ないわ。

晴夏 傲慢な考えかもしれないけれど、私にしか、橘さんの苦しみを理解できないと思っ  
ています。無関係の人間に不条理に人生を踏みにじられた者同士にしかわからない痛  
み。橘さんだって、そう思ったから、私を気にかけてくれたんですよ。

悠 ……自分と重ねていなかったと言えば、嘘になるわ。でも、それだけじゃない。

晴夏 橘さんがいたから私は救われました。橘さんが私を救ってくれたんです。橘さんの  
助けがなかったら、私はきっと生きることの意味が見いだせず、自ら命を絶っていたと  
思います。だから今度は私が橘さんを助けたいんです。生意気かもしれないですけど、  
少しでも力になりたいんです。

悠 ……ありがとう。気持ちだけで充分だわ。

長い沈黙。

悠は晴夏から視線を逸らし、下を向く。

床にはジュースとコーヒートとチョコレートが散乱している。

悠はゆっくりと椅子に座る。

晴夏 苦しみを抱え続けて生きていくなんて、私にはできません。そんなことをしてい  
たら、いつか壊れてしまいます。私にもそれは分かります。私だってずっと苦しんできま  
したから。その苦しみは、自分で手放すしか逃れられる方法はないんです。

悠 ……私と日向の苦しみは違うわ。私の痛みは癒えることはないの。

晴夏 そう思っているのは橘さんです。そう思いたいんです。痛みには種類はないんです。  
大きさしかないんです。

悠 勝手なことばかり言わないで。

晴夏 私……橘さんを赦します。

悠 え？

晴夏 ずっと私を妹のように可愛がってくれたじゃないですか。私を妹のようだって言っ  
てくれたじゃないですか。だから、妹の私が、橘さんを赦します。だから……。

悠 ふざけないで！

晴夏 ふざけてなんかいません。死んだ人は戻ってこない。妹さんは戻ってはこない。だ  
から、私が橘さんを赦すしかないんです。お願いです。もうこれ以上、自分で自分を縛  
り付けないで下さい。自分が赦せないというなら、私が橘さんを赦しますから。

見つめ合うふたり。

悠は小さく震えている。

悠 そんなこと言われても……。私にはわからない。ずっとひとりで生きてきたんだから。  
ずっとひとりぼっちだったんだから……。

晴夏に背を向けて、悠は泣きだす。

その姿はまるで小さな子供のよう。

晴夏は悠が泣き止むまでじっと待っている。

晴夏 いろいろと言い過ぎました。けど、これが私の気持ちです。怒られるとは思っていませんけど、どうしても伝えたくて。伝えなくてはいけないと思って……。ごめんなさい。悠 ……………。

泣き止んだ悠は、床に散らばったチョコレートを拾い始める。

悠 カウンセリングは……今日で終わりにしましょう。

晴夏 ……はい。

悠 もう晴夏は立派な大人よ。

晴夏 そんなことはありません。

晴夏は椅子から立ち上がる。

悠はまだチョコレートを拾っている。

晴夏 私は……橘さんに幸せになってほしい。ただそれだけなんです。

悠 ……まるで私がカウンセリングを受けているみたいね。ありがとう。気持ちは十分に伝わったわ。

立ち上がる悠。

悠を正面から見つめる晴夏。

悠 いろんなことを言われても……私は変わらない。変わることができない。今までだって、さんざん努力はしてきた。でもダメだった。変わってしまうことが怖い。家族の死を忘れてしまうことが怖い。

晴夏 仮に忘れてしまっても、怒る人は誰もいませんよ。

悠 そうね……。

晴夏 犯人の思い通りになりたくない気持ちはわかります。でも、今の橘さんを苦しめているのは橘さん自身です。自分で自分を縛っているように、自分で自分を罰しているように私には見えます。

悠 ……ありがとう、日向。でも、私には……。この話はもう終わりにしましょう。

晴夏 ……はい。

悠 日向の気持ちはよくわかった。でも、私も大人だから、自分のことは自分でなんとかするわ。さあ、帰りましょう。

時間が止まってしまったかのように、見つめあう二人。

いつまでも動くことがない。

溶暗。

晴夏の部屋。

ゴミが散乱する部屋に佇む晴夏。

ベッドの上に置かれている剃刀を手取る。

しばらく見つめたあと、剃刀をゴミ袋に捨てる。

そのままゆっくりと部屋の片付けを始める。

溶暗。

悠の部屋。

家族写真を手にし、悠が立っている。

悠

日向……私にもできるのかな？ 忘れることなんて、できるのかな？

赦されること

なんて……そんな日がくるのかな？

悠は家族写真を、机の上に伏せて置く

悠

私は……お姉ちゃんだから……お姉ちゃんだけど、もういいよね。

伏せた写真に向かって、悠はひとりごちる

しばらくすると、ゆっくりとベッドに横たわり、目を閉じる。

やがて安らかな寝息が聞えてくる。

溶暗。

六場

取調室。

部屋の中には晴夏と悠がいる。

ふたりとも夏を感じさせる服を着ている。

晴夏は椅子に座っているが、悠は晴夏に背中を向けて、閉まっている窓を見ている。窓からは強い日差しが入り込んでいる。

悠 連絡くれてありがとう、日向。久しぶりね。会えて嬉しいわ。

晴夏 私も、会えて嬉しいです。前は……気まずい別れ方をしてしまったから……それで、どうしていいのか、私にはわからなくて。

悠 私だってそうよ。本当は私から連絡しなくちゃいけないのに……自分で理由を作って先延ばしにしていたの。

晴夏 あの時はいすぎました。ごめんなさい。

悠 いいのいいの。私は何も気にしてないわ。それに、謝らなくてはいけないのは私のほうよ。ごめんなさい。それと……ありがとう。

悠は晴夏に頭を下げる。

晴夏 ……ありがとう？

悠 私ね、来月いっぱい退官することにしたの。今は、引継ぎと残務処理に追われる日々よ。

晴夏 え？ どうして？

悠は晴夏と向き合い、椅子に座る。

悠 私、日向に「世界に絶望して自殺するのもアリだけど、それは犯人に人生を操られえているみたいだから気に入らない。だから私は生きるんだ」って、そう言ったじゃない。

晴夏 ……憶えています。すごく強い人だと思いました。

悠 強くなかないわ。そうやって虚勢をはることでしか生きていけなかっただけ。それって、結局は自分の弱さを必死に隠していただけなのよ。たぶんね。だから警察を辞めるの。

晴夏 ……今の話がどう繋がるんですか？

悠 犯人のせいで人生をゆがめられ、それに抗うために生きてきたつもりなのに、私はあの事件がきっかけで警察官になった。それは結局、犯人にゆがめられた人生のレールに乗っているってことなんじゃないかって……そう気づいた。私の人生じゃないって思うようになったの。気づかせてくれたのは、日向、あなたよ。

晴夏 だからって、今更辞めなくてもいいんじゃないですか？

悠 もう決めたことだから。

晴夏 誰だって、ほんの些細なきっかけで、何かを目指したりするんじゃないですか？

橘さんが警察官になったことだって、私には必然だったように思います。

悠 そうね。日向の言う通りだと思う。でも、私は……私は本当は刑事なんかやりたくないし、そもそも向いているとも思えないのよ。酷い話よね。あはははは。

悠は大声で笑う。

晴夏はどうしたらいいかわからない顔で悠を見ている。

悠 もっと言うかね、刑事をやっているのは、私は幸せにはなれないことに気づいてしまった。犯罪者を捕まえることで、私は自分の罪を償おうとしていた。犯罪者を自分にみたくて、捕まえることで自分を罰していた。けど、そんなものでは私の罪は消えない。いえ、罪は何をやっても消えないの。犯人が死刑になっても、事件が消えてなくならないように……。

晴夏 橘さんに罪なんてありません。私にだって言ったじゃないですか、悪いのは全部犯人だって。ひとかけらの罪も私にはないって……。それは橘さんも同じです。

悠 ……ありがとう。こんな人間がカウンセリングだなんて、今思えば滑稽な話よね。私のほうが日向より、誰かに助けを求めてたつてのに。

晴夏 橘さんには「自分を責めないで」って言ったくせに、ずっと自分を責め続けていたんですね。

悠 ……そういうことになるのかな。私は日向みたいに、自分を許すことなんて……たぶん死ぬまでできないから。

晴夏 退職して、どうするんですか？ まさかニート生活ですか？

悠 心理カウンセラーを本格的に目指してみようと思ってるの。自分を許せないからこそ、同じように苦しんでいる人に、何か道を示すことができるかもしれない。苦しみを知っている人間だからこそ、出来るんじゃないかと思って……夢物語なのかもしれないけど。

晴夏 橘さんなら、きっと大丈夫です。私を救ってくれた人ですから。

悠 日向はどうなの？ ずっとスーパーで働いていくの？

晴夏 それが……私、先週、バイトの大学生から告白されたんです。

悠 は？ え？ そうなの？

驚いて立ち上がる悠。

少しだけ恥ずかしそうにする晴夏。

晴夏 突然のことだったので、私もだいぶ戸惑いました。まさか、私なんか恋愛対象になっっているとは思ってなくて。

悠 いやいや。日向は可愛いから。なんせ、誘拐したいぐらいだし。

晴夏 もう、橘さん。言っただけいいこと悪いことがありますよ。

悠 で、返事はしたの？

晴夏 まだ保留していますが……せつかくでするので、付き合ってみようと思ってます。

悠 ……そう。それがいいと思うわ。



晴夏 少し前まで、私みたいな人間は、誰かから愛される資格なんてないと思ってました。そもそも愛や恋愛が何かなんてわかっていませんでした。まあ、今でもよくわかりませんけど。

悠 うっ、恋愛に対しては、私も日向と似たようなレベルなのかもしれないわ。

晴夏 そういえば、橘さんは彼氏とかいないんですか？

悠 ……いないわよ。悪かったわね。

晴夏 ずっと？

悠 警察学校時代にひとり付き合っただけど、うまくいかなかったの。それ以来……。

晴夏 もしかして処女なんですか？

悠 日向！ ちょっと告白されたからっていい気になってんじゃないわよ。

晴夏 さっきのお返しです。

悠、椅子に座る。

晴夏 好きな食べ物もできました。麩饅頭が今の私のベストスイーツです。

悠 また、渋いチョイスね。

晴夏 いまだに自分が好きだった食べ物を思い出せません。でも、もういいんです。それでいいと思えるようになりました。変わらないものなんてない。変わらない人なんていない。変わることはとても怖いけれど、変わりながら生きていくしかないんです。

悠 私はずっと、変わらないことが強さだと思っていた。だけど、そんな強さもあるのね。  
晴夏 私は強くなってありません。自分を保てないほど、弱くて弱くてちっぽけな人間です。でも、流されながら、たゆたいながら生きていくのも悪くないのかな。そう思うようになったんです。思うようになったんです。それは橘さんのおかげです。

悠 お互いに、止まっていた時間が、流れ始めたってことかしら？

晴夏 あれ、上手いこと言ったつもりですか？

悠 感動的なシーンだったのに、もう台無し。

晴夏 橘さん、幸せになってください。幸せになれるように生きて下さい。それが私の願いです。

悠 ありがとう。できるかはわからないけど、頑張ってみるわ。そのために退官したんだしね。

悠は椅子から立ち上がり壁の方に歩いていく。

壁には天窓を開閉させるハンドルがある。

悠はハンドルをまわし、窓を開け放つ。

窓の外から吹き込んでくる夏の風が、部屋の中を満たす。

晴夏 では、そろそろ行きます。バイトの時間もありますので。

悠 告白の返事をしなくちゃいけないし、ね。

晴夏 そうですね。橘さんも早く彼氏ぐらい作った方がいいですよ。いい歳なんですから。

悠 ……今に見てなさいよ。私だって、過去に何度か告白されたことがあるんだから。私

が本気を出せば、彼氏どころか結婚だってちよちよいのちよいよ。  
晴夏 私だって、心配はしていません。橘さんは魅力的な女性ですから。

照れたように頬をかく悠。  
悠は大きな伸びをしたあとで、晴夏を見る。

悠 この部屋も今日で見納めか。

晴夏 そうですね。私たちの思い出の場所なので、少し寂しいです。

悠 そう？ 私はそんなことないけど。むしろ黒歴史の塊みたいな場所だから。

晴夏 橘さんとの……あの部屋で過ごした時間があつたから、今、私は生きいるんです。

悠 大げさよ、日向……。日向にはもともと生きていく力があつた。私はただちよつと背中を押してあげただけ。それも、今日で終わり。これからは、それぞれの道を歩んでいきましよう。

晴夏 はい。喜ぶべきことだと思うけど、なんだか、とても寂しいです。会いたくなつたら、電話してもいいですか？

悠 もちろんよ。いつだって、会いたくなつたら電話してちようだい。どこにいたつて飛んでいくから。私たち、姉妹みたいなものなんだから、遠慮なんかいらぬのよ。

晴夏 ありがとう。お姉ちゃん。

悠 さあ、もう行かなくちや。玄関まで、見送るわ。

晴夏も立ち上がる。

二人で並んで取調室を出る。

舞台装置が消え、素舞台になる。

外はむせかえるような夏の熱気に満ちている。

玄関の扉の前に立つ晴夏と悠。

晴夏 今までありがとうございました、橘さん。

悠 お礼を言わなければいけないのは、私の方よ、日向。ありがとう。

晴夏 あの……私の最後のわがままです。今、この瞬間だけ、名前で呼びあいませんか？ 私たち姉妹なんですから名字呼ぶのはおかしいです。

晴夏の言葉にうなづく悠。

ゆっくりと、お互いがまっすぐに向き合う。そして、

悠 さようなら……晴夏

晴夏 さようなら、悠

晴夏は悠に背中を向けて、一步を踏み出す。

悠も晴夏に背を向けて警察署に入っていく。

晴夏を歓迎するかのように蝉しぐれが響きわたる。

照り付ける日差しの中、晴夏はゆっくりと空を見上げる。

晴夏

ああ、きれいな青空。

そう言って、晴夏は少しだけ……笑う。

しばらく空を見つめているが、やがてゆっくりと歩き出す。

自らの足で、一歩ずつ。

青空はどこまでも広がっている。

幕